

髪毛焼き～酒井明 説話集 18※～

近頃でこそ、近辺の山の中はどこも、人の入らんとこはないような様子になったが、昭和の始め頃はめったに人の入らんとこが多かった。

久礼の川の基次おじは若い頃の苦労話を聞かせてくれたが、こんなことを言いよった。

「何というても山の中で、生業いうたら炭焼きで、杉檜の植林ちゅうもんは山持ちの旦那のやること。

雇われは、下草刈りや枝打ちに行く。秋近うなると旦那の田圃の稲を荒らしにやって来る猪追い。昼間は出てもそれ程でもないが、夕方近うやって来てとったら山田の稲は時に一晩でなしになる。油断もすきもあつたもんではない。

照ろうと降ろうとこの猪追いには泣かされた。箕の水でカンカン叩いたくらいではすぐ慣れる。

髪毛焼きがやっぱり効目があつたように思うが、なんせ髪結いなんかからもろうてきた髪のを、縄にして火をつけばなしにしておいたら、ざんじのうなるので、谷間に一応臭いが回ったら消して帰らんといかん。いろんな仕事の中でもこいつは辛かつた」

こんな話をしてくれながら歌ってくれたのも、懐かしい思い出になっている。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。